ISSN: 2189-793X

Amami Station, Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

島嶼研分室だより

とうしょけんぶんしつ

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 4
2017 年 3 月

企画紹介 p2
シンポジウム「奄美・沖縄諸島先史学の最前線」 高宮広土
研究紹介 p3
「海中温泉に生息するホウキガニ属 Genus *Xenograpsus* について」 鈴木廣志
「奄美大島における河畔植生の成立要因と種多様性維持機構に関する研究」 川西基博
活動報告 p4
学生島体験！ p8
「島人とその暮らしを訪ねて」 宋　多情

シンポジウム「奄美・沖縄諸島先史学の最前線」

高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター教授）

平成 29 年 1 月 22 日（日）にシンポジウム『奄美・沖縄諸島先史学の最前線』が開催された。本シンポジウムの目的は奄美の方々に先史学の最新のデータを還元することであり、主なテーマは奄美・沖縄人の起源と島嶼環境への適応であった。

「起源」については、篠田謙一（国立科学博物館人類研究部）による『DNA からみた南西諸島集団の成立』があり、琉球列島最古のヒト（旧石器時代人）にすでに現代奄美・沖縄人に通じるハプログループが存在すること、それが南方起源であること、さらに喜界島の中世人は沖縄や本土の日本人とも異なるという説明があった。また、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）の『奄美諸島から出土した古人骨』では、奄美諸島から検出された人骨から読み取れる顔つきや身長などの話があり、貝塚時代人は短頭・低顔・低身長で特徴付けられ、男性は平均 155cm、女性は平均 145cm 以下であった。中世になると奄美・沖縄の人々の体の特徴は激変し、長頭・高顔・高身長となり、男性で平均 160cm、女性で平均 150cm であったという。

次に「適応」に関しては 4 本の報告があった。まず、米田穣（東京大学）は『骨の化学分析からみた南西諸島の人々の食生活』と題し、古人骨の炭素・窒素安定同位体分析によって解明された食性について紹介した。米田によると、貝塚時代人の食性はサンゴ礁資源が重要な資源で、グスク時代になると雑穀利用が顕著になる。興味深い点は合葬されていた女性と乳児の分析結果で、乳児は母乳を飲んでいなかったという。次に黒住耐二（千葉県立中央博物館）は『奄美の遺跡から出土する貝』で、まず、貝塚時代人が多種多様な貝類を食料・製品・交易品として利用していたことを言及した。食料としてはマガキガイやヤコウガイが好まれ、数千年前から島民の味覚が変化していないと述べた。また世界で沖永良島にしか生息しないエラブマイマイが遺跡から出土し、貝塚時代にはこの島は広い森林に覆われていたことを明らかにした。

3 本目は樋泉岳二（早稲田大学）による『遺跡出土脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の動物資源利用』で、この地域での脊椎動物利用は、イノシシを重点的に利用する時期、魚類を主に利用する時期、そして家畜が入ってくる時期の 3 大画期があった。特に 2 番目の時期は数千年間続き、この点は世界的に大変珍しいという。また徳之島ではアマミノクロウサギを好んで食していたことも報告された。最後に高宮は『奄美・沖縄諸島先史時代の植物資源利用』について発表した。主な内容は奄美・沖縄諸島のような島で貝塚時代に狩猟採集民が存在したことは世界的に稀な文化現象であること、しかし 10 世紀前後に農耕への変遷が確認されたこと、農耕は北から南へ拡散したことであった。

当日は 130 名以上の参加があり、立ち見も出るほど大盛況であった。質疑応答では参加者から多くの質問があり、このことは彼らが本シンポジウムに熱心に耳を傾けてくれたことを示唆する。実際、アンケートでは「大変ためになった、もっとこのようなシンポジウムを開催してほしい、自分の島に誇りを持てた」など肯定的な意見が大半を占めていた。今現在も進行中の調査や研究についても、新たな成果を地元に還元することを継続してできればと思う。

住吉貝塚（沖永良部島知名町）の発掘現場
遺跡は過去を語るタイムカプセルである

薩南諸島における研究の紹介

海中温泉に生息するホウキガニ属 Genus *Xenograpsus* について

鈴木廣志（鹿児島大学水産学部教授）

世界自然遺産の登録候補地になっている奄美群島や沖縄島を含む南西諸島は固有種、希少種などが多数生息する多様性に富んだ地域です。この南西諸島には、霧島火山脈に属する島嶼が多くあり、その周辺には火山性噴気や温水が湧出しているいわゆる「海底温泉」も多数存在します。私は、この海底温泉にのみ生息しているホウキガニ類を研究しています。

現在ホウキガニ類は、1975 年にニシノシマホウキガニ *Xenograpsus novaeinsularius* が小笠原諸島の西之島新島で発見されて以来、3 種が報告され、1992 年に十島村悪石島および東京都北硫黄島でニシノシマホウキガニが、2000 年に台湾北部亀山島周辺からタイワンホウキガニ *X. testudinatus* が、2007 年にニュージーランド領ケルマディック諸島周辺から *X. ngatama* が報告されています（McLay 2007; Ng *et al.* 2000; Takeda & Kurata 1977；武田ら 1993）。

その後、2011 年に三島村昭和硫黄島周辺でタイワンホウキガニの生息が確認されると同時に、悪石島の個体群もタイワンホウキガニであることが確認されました（Ng *et al.* 2014）。また、2016 年夏には口之島の海中温泉でもホウキガニ類のカニが採集され、秋には口永良部島の海中温泉でもタイワンホウキガニの生息が確認されました。

ホウキガニ類の生息している環境は特異で、通常の海水の pH が 8.3 前後なのに対し 6 前後と極めて低く、地温も 40 度以上を示します。今後は、ホウキガニ類が、なぜ、このような特異な環境に生息しているのか、また、子供たちはどのようにしてこのような環境を探しているのかなどを研究する予定です。同時に、南西諸島の未調査の「海中温泉」における生息状況も明らかにしていきます。

タイワンホウキガニ *Xenograpsus testudinatus*

奄美大島における河畔植生の成立要因と種多様性維持機構に関する研究

川西基博（鹿児島大学教育学部准教授）

河川沿いでは様々な強度、頻度の洪水攪乱によって多様な生育立地が形成されます。このような環境に成立する河畔植生は種多様性が高く、流域の生物多様性の維持において重要な存在です。南西諸島の固有植物には、渓流沿いに限って生育する種が知られており、その生態には大変興味深いものがあります。一方、河川改修など様々な要因で多くの種が絶滅危惧の状態にあり、効果的な保全が望まれます。しかし、亜熱帯島嶼の河畔植生については不明な点が多いのが現状です。そこで、奄美大島における河畔植生の成立要因と種多様性の維持機構を明らかにすることを目的として調査を進めています。

これまでの調査で奄美大島の河畔植生の大まかな構造がわかってきました。まず、中上流部の谷壁斜面や小段丘上には、シマサルスベリ、エゴノキなどの落葉樹とタブノキ、イジュなどの照葉樹が混生した森林がみられます。これに隣接する中上流部の露岩上にはケラマツツジなどの低木や、ヒメタムラソウ、コケタンポポといった渓流植物と呼ばれる小型の草本からなる低木・草本群落がみられます。特に住用川上流から中流域の広い河床に顕著にみられるタイプで、奄美または琉球の固有種が多く含まれます。そして、中下流の河川敷にはイネ科、タデ科、カヤツリグサ科など様々な草本群落から構成される河畔植生が成立しています。ここでは外来種も多く、近年ではオオフサモなどの特定外来種も確認されています。

今後、河畔植生全体の成立要因を明らかにするための調査を進めるとともに、外来種の分布状況を把握し、追跡調査を進めていく予定です。

奄美分室の活動報告（2016年９月～2017年２月）

＜シンポジウム・講演会等＞

・鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「奄美・沖縄諸島先史学の最前線」
2017年１月22日（日）、AiAiひろばにて（Skypeを介して郡元キャンパスにも中継）
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
共催：奄美市、奄美群島広域事務組合
後援：鹿児島大学かごしまCOCセンター
講演：「DNAからみた南西諸島集団の成立」　篠田謙一（国立科学博物館人類研究部）
「奄美諸島から出土した古人骨」　竹中正巳（鹿児島女子短期大学生活科学科）
「骨の化学分析からみた南西諸島の人々の食生活」　米田　穣（東京大学総合研究博物館）
「奄美の遺跡から出土する貝」　黒住耐二（千葉県立中央博物館）
「遺跡出土脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の動物資源利用」樋泉岳二（早稲田大学教育学部）
「奄美・沖縄諸島先史時代人の植物資源利用」高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

本シンポジウムでは、島嶼の先史時代について第一線で研究を行う6名による講演が行われ、南西諸島に人がどのように渡ってきてどのような生活をしていたのかについて最新の研究成果が紹介された。当日は会場の部屋を埋め尽くす数の参加者があり、盛況に終わった。会場からはスダジイやソテツの利用に関する質問があり、市民の関心の深さがうかがえた。会の詳細については本紙巻頭をご一読頂きたい。

奄美・沖縄諸島先史学の最前線
（2017年１月22日）

＜セミナー・観察会等＞

・第３回奄美の生物多様性観察会「サンゴ礁の生き物を観て触って感じよう！」
2016年９月17日（土）、大浜海浜公園にて
主催：鹿児島大学「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」プロジェクト
奄美市教育委員会
後援：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：上野大輔（鹿児島大学理工学研究科）、
藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

昨年度の干潟観察会に引き続き、本年度は奄美大島を特徴づける海岸環境のひとつ、サンゴ礁海岸の生き物観察会を実施した。当日は生憎の雨混じりの天気だったが、参加者自ら熱心に生き物探しを行い、配布資料と見比べながら講師らの説明に聞き入った。

サンゴ礁の生き物を観て触って感じよう！
（2016年９月17日）

・第 4 回奄美の生物多様性観察会「初冬の奄美で森の木を見る会」

2016 年 12 月 24 日（土）、奄美自然観察の森にて
主催：鹿児島大学「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」プロジェクト
　　奄美市教育委員会
後援：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：鈴木英治（鹿児島大学理工学研究科）、鈴木真理子（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

昨年に引き続き、オリジナルの奄美植物図鑑の入ったタブレットやスマホを使って植物観察会が行われた。今回は天気にも恵まれ、冬のきりりと冷えた空気の中、親子や友人で協力して植物の名前当てをしてもらった。ゴールまでたどり着けなかった組が多かったが、「植物をこんなにじっくり見たことなかった」といった感想があり、参加者はゲーム感覚で植物観察について楽しく学んでいた。

初冬の奄美で森の木を見る会
（2016 年 12 月 24 日）

・奄美市まなび・福祉フェスタ「鹿児島大学島嶼研『出張研究室』」ブースの出展

2017 年 2 月 26 日（土）、奄美文化センターにて
主催：奄美市、奄美市教育委員会
後援：南海日日新聞社、奄美新聞社、あまみエフエムディ！ウェイヴ、アマミテレビ、大島教育事務所、県立奄美少年自然の家

国際島嶼教育研究センターや鹿児島大学「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点の整備」プロジェクトで行われている研究について、写真などを用いて、奄美分室が開設されてから行ってきた観察会や研究会などの写真を展示した。また、観察コーナーでは、参加者らにデジタル顕微鏡を使ってもらうなど、実際に研究に用いている標本観察を体験してもらった。生憎の雨模様にも関わらず、行政関係者から小学生の子供まで、多数の市民が展示に見入っていた。

鹿児島大学島嶼研「出張研究室」
（2017 年 2 月 26 日）

・奄美分室で語りましょう（島嶼研勉強会）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（奄美分室）
第 11 回：2016 年 9 月 29 日（木）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
話題：「奄美大島で昔おこなわれていた漁法について」飯田　卓（国立民族学博物館先端人類科学研究部）
第 12 回：2016 年 10 月 24 日（月）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
話題：「ニュージーランドにおける外来種対策」アル・グレン（ニュージーランド保全管理研究所）
第 13 回：2016 年 12 月 9 日（金）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
話題：「ヒメハブおよびアカマタの体サイズと出現するカエル類の関係について」
西　真弘（九州両生爬虫類研究会）

不定期開催で、研究者や一般市民が集い語らい、教養を深める場として開催している小規模勉強会、「奄美分室で語りましょう」。2016 年度下半期には、奄美大島での研究紹介のほか、海外の研究者を招いて国際的な事例を学ぶ勉強会となった。

・出張・奄美分室で語りましょう~加計呂麻島特別セミナー~
「地域共有資源としての奄美の景観～自然と文化が織りなす景観の価値～」
2017 年 1 月 15 日（日）、加計呂麻展示・交流体験館にて
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（奄美分室）、同志社大学グローカリズム研究会
概説：大西秀之（同志社女子大学現代社会学部）
講演：「奄美大島-加計呂麻島特有の内湾性サンゴ群集」 藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「誰にとっての『遺産』か？：『ユネスコ世界遺産』と『奄美遺産』をめぐって」
石村　智（東京文化財研究所無形文化遺産部）
「野生動物の観光利用を考える–動物への影響評価–」
鈴木真理子（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「ボトムアップからの遺産構築：グローバルな普遍的価値に対する「奄美遺産」の可能性」
大西秀之（同志社女子大学現代社会学部）
「世界自然遺産と同等の価値がある（？）奄美・沖縄諸島の先史時代」
高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

加計呂麻島で長年の間、実習および調査を行ってこられた同志社女子大学の大西教授と、文化財の専門家の石村博士との共同セミナーとして、分室を飛び出して加計呂麻島で開かれた「出張・奄美分室で語りましょう」。世界自然遺産に関心のある多くの島民が参加し、活発な質疑応答となった。

出張・奄美分室で語りましょう
（2017 年 1 月 15 日）

・島嶼研研究会ネット中継会

島嶼研郡元キャンパスで定期開催される研究会のインターネット中継を行っている。2016 年 9 月から 2017 年 2 月の間に計 4 回開催された。
島嶼の漁業や医療問題など、奄美群島にも当てはまるさまざまな問題が取り上げられた。また、10 月 29 日に郡元キャンパスで行われた島嶼研シンポジウム「島々が育むウミガメたち–研究と保全の最前線から–」も、インターネットを介して奄美分室にて中継された。

第 175 回島嶼研研究会のネット中継
（2017 年 2 月 13 日）

＜奄美分室関連新聞報道記事（平成 28 年度）＞

2016 年 5 月 9 日　南海日日新聞 p5「生物多様性連載を終えて　自然遺産　世界への責任」
2016 年 5 月 13 日　奄美新聞 p1「奄美を多面的研究　鹿大教授ら執筆『鹿児島の島々』発行」
2016 年 5 月 21 日　奄美新聞 p8「新たな共生関係確認　鹿大島嶼研奄美分室加計呂麻沿岸浅海で」
2016 年 5 月 21 日　南海日日新聞 p8「サンゴとヤドカリ共生　瀬戸内町の浅海で初確認」
2016 年 5 月 25 日　南日本新聞 p15「サンゴとヤドカリ同居　鹿大島嶼研・藤井氏が学術誌発表」
2016 年 6 月 5 日　南海日日新聞 p8「奄美初の分布記録　鹿大など合同研究チームが論文」
2016 年 6 月 5 日　奄美新聞 p8「コモチハナガササンゴ　奄美群島の海域で初記録」

2016 年 7 月 2 日　南日本新聞 p13「『奄美研究本』刊行相次ぐ　生物多様性切り口に」
2016 年 8 月 6 日　南海日日新聞 p1「気候変動との関わりなど報告　サンゴ礁研究の重要性確認」
2016 年 8 月 8 日　南海日日新聞 p1「固有種減少で警鐘も　観光利用ルールづくりを」
2016 年 8 月 21 日　南海日日新聞 p10「干潟の生き物を観察　子ども博物学士講座」
2016 年 9 月 18 日　奄美新聞 p10「身近な海の生態学ぶ　大浜海浜公園でサンゴ礁の生き物観察会」
2016 年 9 月 18 日　南海日日新聞 p8「海の豊かさ再確認　親子連れ、大浜で生物観察会」
2016 年 9 月 29 日　奄美新聞 p9「人による環境への影響見えず　狩猟採集、自然と調和か」
2016 年 9 月 29 日　南海日日新聞 p8「世界的学会で研究報告　先史時代の奄美、海外も注目」
2016 年 10 月 12 日　奄美新聞 p8「希少種『エンマノホネガイ』　国内水族館では初展示」
2016 年 10 月 28 日　奄美新聞 p1「ノネコ山中で繁殖か　親子、エサ運ぶ姿映像に」
2016 年 10 月 30 日　南海日日新聞 p9「山中でノネコ繁殖か　鹿大島嶼研が親子を撮影」
2016 年 11 月 6 日　沖縄タイムス p26「奄美大島に熱帯地域の貝　二十数年ぶりに発見」
2016 年 11 月 10 日　奄美新聞 p9「先史時代の奄美・沖縄　農耕生活との比較紹介も」
2016 年 11 月 10 日　西日本新聞 p22「閻魔大王にちなむ貝発見　奄美大島」
2016 年 11 月 10 日　南日本新聞 p16「瀬戸内の海に珍貝　奄美海洋展示館で展示」
2016 年 11 月 16 日　南日本新聞 p23「鹿大・河合教授に社会連携賞　奄美研究成果を地元還元」
2016 年 12 月 1 日　奄美新聞 p1「地域研究コンソーシアム賞受賞　地域一体活動、知識還元評価」
2016 年 12 月 1 日　南海日日新聞 p9「奄美での活動を評価　『社会連携賞』を受賞」
2016 年 12 月 5 日　琉球新報 p26「サンゴ、浅海も対象に　遺産登録向け議論」
2016 年 12 月 5 日　南海日日新聞 p9「陸域、海域連動を確認　サンゴ保全で公開シンポ」
2016 年 12 月 20 日　南日本新聞 p14「地域研究コンソーシアム社会連携賞　受賞報告」
2016 年 12 月 25 日　奄美新聞 p9「鹿大制作の植物図鑑活用　名前の調べ方学ぶ」
2016 年 12 月 25 日　南海日日新聞 p9「初冬の樹木の特徴学ぶ　デジタル図鑑参考に」
2017 年 1 月 1 日　奄美新聞 p27「山中で繁殖推察の映像撮影　希少種や固有種捕食裏づけ」
2017 年 1 月 1 日　奄美新聞 p40「奄美（沖縄）諸島のたから　貝塚時代にもあった環境文化型」
2017 年 1 月 16 日　南海日日新聞 p8「『奄美遺産』継承が課題　加計呂麻島で公開セミナー」
2017 年 1 月 14 日　奄美新聞 p1「奄美・沖縄諸島先史学の最前線　シンポジウムによせて」
2017 年 1 月 17 日　南海日日新聞 p8「奄美・沖縄諸島先史学の最前線　開催によせて」
2017 年 1 月 23 日　奄美新聞 p9「南西諸島の遺伝的な連続性確認　奄美・沖縄諸島先史学の最前線」
2017 年 1 月 23 日　南海日日新聞 p9「先史時代の謎に迫る　奄美市でシンポジウム」
2017 年 1 月 24 日　奄美新聞 p8「奄美独自の歴史解明期待　DNA 用いた遺伝子研究」
2017 年 2 月 3 日　琉球新報 p23「世界の中の琉球列島　先史時代、日本に 3 文化」」

＜奄美分室来訪者数＞

のべ 154 名（2016 年 9 月 1 日～2017 年 2 月 28）

地元高校生の訪問
（2016 年 10 月 26 日）

整備が進む実験室
（2017 年 2 月 21 日）

～学生島体験！vol.4～
「島人とその暮らしを訪ねて」

宋（ソン）　多情（ダジョン）　（鹿児島大学人文社会科学研究科博士後期課程二年）

今日は私の素敵な調査パートナーを紹介したい。奄美市住用町市集落に住んでいる、今年68歳になる山下茂一さん、通称しげ兄（にぃ）である。私は、2014年10月から半年間、奄美市のインターンシップで住用町の観光メニューの創出に関わった。しげ兄は、その取り組みにおいてキーパーソンとなる住民の一人であった。以前から奄美大島をフィールドに調査はしていたが、特定した地域に深く入り込んだことがない私を、しげ兄は住用の人々と結んでくれた。事業が終わった後も、調査地として島に訪れる際には安らぎの場所として住用に通うようになった。

調査パートナーである山下茂一さん

去年の11月、地域住民のマングローブ原生林利用について調べたいと初めて自分の研究を持ち込んだ私に、しげ兄は喜んで調査のさばくり（島の方言、段取り）をしてくれた。しげ兄の軽トラに乗ってマングローブに隣接した集落をまわり、昔のことをよく知っている年配の方々に事前の約束なしで訪問したり、そこから聞いた話を確かめるために現場に行ったり、しげ兄はわたし本人よりも熱心に調査に向き合ってくれた。

「住用のことだから、手伝わなきゃ」というしげ兄の一言、そこから私は責任感を感じた。調べた様々な言説をきちんと記述して残すといった、自分なりの方法で地域に還元したい。そうするために、しげ兄の軽トラに乗って、調査は続く。

編集後記

同じ島内でも、場所ごとに大きく異なる海中風景が広がるのが奄美大島の海の魅力。これらの景色は、いつ、どのように作られたのか、先史学や地質学の研究成果を聞くたび、学際的な興味が新たにわいてきます。

藤井琢磨

2年目を終えて、奄美のお気に入りができました。お気に入りの風景、お気に入りの肉味噌、お気に入りの焼酎、お気に入りの歌。それでも新しい発見が日々あり、まだまだ知らない奄美があるんだなと感じます。

鈴木真理子

島嶼研分室だより No. 4

平成29年3月16日発行
鹿児島大学
国際島嶼教育研究センター奄美分室
〒894-0032
鹿児島県奄美市名瀬柳町2-1
TEL: 0997-69-4852　FAX: 0997-69-4853
E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：ヤコウガイ（生時）。奄美大島北部沖合海中にて。先史から現在に至るまで、島では様々なかたちで利用されてきた貝。
（撮影：2016年9月5日、藤井琢磨）

ISSN: 2189-793X